

令和元年産大崎地域の 大豆作技術情報（第3号）

令和元年8月21日発行
宮城県大崎農業改良普及センター
TEL: 0229-91-0726 FAX: 0229-23-0910
<http://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

～栽培のポイント～

- 天候に留意し、干害・湿害対策を行いましょ。
- 病害虫防除を適期に行いましょ。

1 気象経過

- 最高・最低気温は6月3半旬～7月1半旬まで平年並でしたが、7月2半旬～7月5半旬までは最高気温が平年より低く、最低気温が平年並～低くなりました。その後は、最高・最低気温ともに平年より高くなりました。
- 日照時間は6月3半旬～7月1半旬まで平年並～少なく、7月2半旬～7月5半旬までは平年より短くなりました。その後は平年より長くなりました。
- 降水量は6月6半旬にまとまった降雨がありましたが、7月1半旬～8月2半旬までは平年より少なくなりました。

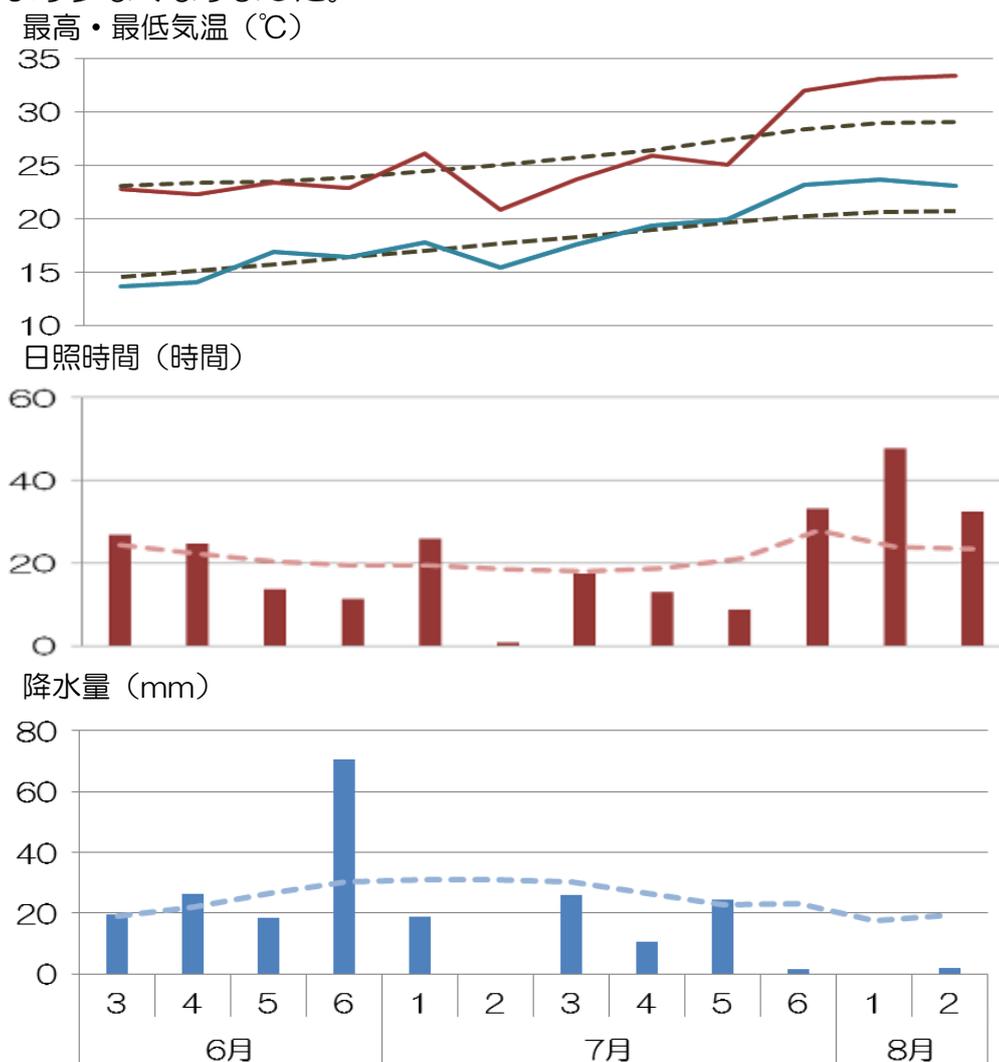


図1 6月中旬～8月上旬の気象 (点線は平年値)

2 生育概況

播種は概ね適期に行われ出芽は良好でしたが、7月からの低温・日照不足により、生育量は平年を下回りました。またほ場が乾かなかつたことで、一部ほ場で湿害が見られました。

8月7日の生育調査結果では、7月下旬からの高温・多照により、生育がやや回復しましたが、平年を下回りました。

生育が遅れた影響により、開花期は平年よりも遅れました。

表1 生育調査ほの生育調査結果

地区名 品種名	区分	7月25日			8月7日		
		茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)	茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
古川 タンレイ	本年	46.8	10.6	2.0	58.9	13.8	3.2
	平年比	92%	84%	102%	95%	96%	97%
古川 ミヤギシロメ	本年	40.1	10.0	1.7	60.5	13.6	3.6
	平年比	85%	86%	75%	74%	84%	90%
古川 きぬさやか	本年	20.6	6.2	0.0	29.6	9.5	1.9
	平年比	57%	64%	0%	51%	74%	74%
中新田 タンレイ	本年	43.0	10.0	1.8	59.3	13.4	3.5
	平年比	71%	78%	76%	78%	89%	126%
小野田 タチナガハ	本年	26.8	7.8	0.3	52.3	12.6	1.9
	平年比	64%	76%	23%	78%	91%	69%

※ 平年比は、過去5か年（平成26年～平成30年）の平均値との比較。ただし、古川きぬさやかは過去4か年（平成27年～平成30年）、小野田タチナガハは過去3か年（平成28年～平成30年）の平均値との比較。

表2 生育調査ほの生育ステージ

地区名 品種名	区分	播種日	開花期
古川 タンレイ	本年	5月26日	7月31日
	平年差	(2日早い)	(6日遅い)
古川 ミヤギシロメ	本年	6月3日	8月9日
	平年差	(1日遅い)	(6日遅い)
古川 きぬさやか	本年	6月7日	8月5日
	平年差	(平年と同じ)	(5日遅い)
中新田 タンレイ	本年	6月5日	8月2日
	平年差	(5日遅い)	(7日遅い)
小野田 タチナガハ	本年	6月10日	8月5日
	平年差	(平年と同じ)	(4日遅い)

※ 平年差は、過去5か年（平成26年～平成30年）の平均値との比較。ただし、古川きぬさやかは過去4か年（平成27年～平成30年）、小野田タチナガハは過去3か年（平成28年～平成30年）の平均値との比較。



古川タンレイ



古川ミヤギシロメ



古川きぬさやか



古川タンレイ



古川ミヤギシロメ



古川きぬさやか



中新田タンレイ



小野田タチナガハ



中新田タンレイ



小野田タチナガハ

写真1 生育調査ほの様子（上：7月25日調査，下：8月7日調査時点）

3 今後の栽培管理のポイント

(1) 干害・湿害対策の実施

開花期以降（7月下旬～9月上旬）は、大豆の養水分吸収が多くなる時期であり、土壌水分が不足すると落花・落莢が多くなります。

降雨がない日が続く場合は、土壌表面にしみ出す程度まで、排水溝や畦間内に通水を行いましょう。降雨が続く場合は、降雨の前後に排水溝や明きよを点検し、排水が滞らないようにしまししょう。また、水が溜まった所は溝を切り、明きよにつなげ、排水を促進しまししょう。

(2) 病虫害防除

1) 紫斑病 開花期後 20~40 日に防除

- 「タンレイ」は紫斑病抵抗性が“中”であり、連作ほ場や成熟期に降雨が多い場合は多発しますので、**2回防除を徹底**しましょう。
- 同一系統の薬剤を多数回散布すると耐性菌が発生する恐れがありますので、2回防除の場合は異なる系統の薬剤を使用しましょう。
- 収穫が遅くなると紫斑粒の割合が高まりますので、適期収穫に努めましょう。



写真2 紫斑病

2) マメシンクイガ 8月下旬~9月上旬に1回目,その7~10日後に2回目の防除

- 羽化した成虫やふ化直後の幼虫に対する防除が効果的です。
- 大豆を連作すると、越冬幼虫が増加し、食害の発生が多くなりますので、**連作ほ場の発生状況に注意**しましょう。



写真3 マメシンクイガ幼虫

3) フタスジヒメハムシ 8月下旬~9月上旬に防除

- 8月下旬頃までの若莢を食害することで、そこからカビが入り込み、汚粒（黒斑粒）や腐敗粒となります。作付け初年目から被害が出やすい傾向があります。



写真4 フタスジヒメハムシ成虫

4) ジャガイモヒゲナガアブラムシ 8月~9月に防除

- 8月下旬~9月上旬に急激に発生すると吸汁害に伴う早期落葉により、収量・品質に大きな被害が出ます。



写真5 ジャガイモヒゲナガアブラムシ成虫

